

くらし塾 きんゆう塾

02 インタビュー

06 教えて！知るぼると
消費税率10%への引上げに併せて
実施される経済支援策とは？

10 マンガ「わたしはダメサレナイ!!」
地震、台風、豪雨、豪雪……
自然災害に便乗する悪徳商法が
全国で多発

13 連載・エッセイ②
野菜と暮らす春夏秋冬—秋野菜
榊原道子
野菜料理家・フードコーディネーター

16 そこが知りたいくらしの金融知識
賃貸それとも購入？
50代からの住まいを考える

21 まなびや訪問
石川県立金沢商業高等学校

22 知るぼるとNEWS
「金融リテラシー調査2019年」の
結果を公表しました！

24 金融教育の現場レポート
社会人の家計管理を疑似体験
自立のための健全な金銭感覚と
自主的に判断できる自信を養う

28 誌上セミナー
NISAの非課税期間終了後は
どうする？
三つの選択肢の特徴を理解して
投資の目的に合った運用方法を！

30 おたよりコーナー
漢字矢印パズル

31 都道府県金融広報委員会一覧
編集後記

表紙写真

ビッグ・ベンとロンドンの街並み(撮影:上田優紀)
「ビッグ・ベン」とは、イギリスの首都ロンドンの中心部に
位置するウエストミンスター宮殿(英国国会議事堂)の大神
計の愛称です。1834年に宮殿が火災で焼失した後、ゴシ
ックリバイバル様式で再建された建物は、ロンドンの象徴
として世界の人々に親しまれています。夜になると宮殿や
街並みは美しくライトアップされ、散策をする市民や観光
客の目を楽しませてくれます。テムズ川の水面に映えるそ
の姿は、キラキラと光り輝き、とても幻想的です。

戦争を生き抜いた少女時代 やがて銀行で女性管理職に

81歳でスマートフォン向けのアプリを開
発し、「世界最高齢プログラマー」として一
躍有名になった若宮正子さん。はたして、
これまでどんな人生を歩んできたのか、誰
もが気になるところです。

「小学校に入ったときは太平洋戦争のま
ったなかで、とにかくこの状況を生き抜
くことだけを毎日考えていました。です
から、将来何になりたいとか、これからど
んな生き方がしたいなどと考える余裕はあ
りませんでした。でも、決して悪いことば
かりではなくて、何も物がないから自分た
ちで工夫してなんとかしようとするわけ
です。卵が食べなければ鶏を育てたり、野菜
が食べなければカボチャを育てたり。戦争
中の不自由な暮らしが、図らずも創造性を
鍛える結果になったのかもしれないね」。
やがて高校を卒業した若宮さんは、大

手銀行に就職します。積極的に銀行員に
なりたかったというより、「安定してい
て給料もよかったから」というのが理由だ
ったそうです。「当時は就職難でしたから、
自分の適性や好き嫌いで仕事を選ぶとい
うより、雇っていただけるだけでありがた
いという気持ちでした。後の就職氷河期世
代の人たちの気持ちがよく分かります」と
います。

1950年代前半、銀行業務といえば、
ほとんどが手作業の時代。「お札は指で数
えて、計算はそろばん。お客さまの通帳に
名前を記載する際はペン先をインク壺のイ
ンクにつけて書きます。私は手先が器用で
はなかったのです、お札を数えるのも遅く
よく怒られていました。決して優秀な銀行
員ではなかったと思います」。

そんななかでも、業務改善の提案や新
たな業務開発のアイデアなどを書いては、
行内に設けられた投書箱にせつせと投書し
ていたといいます。「例えば、今でいうお

インタビュー

若宮正子 さん

デジタルクリエイター・IT エバンジェリスト

70歳を過ぎて、表計算ソフト「エクセル」を使って図案を描く
「エクセルアート」を生み出し、81歳でスマートフォン向けのゲームアプリを開発、
「世界最高齢のプログラマー」として世界から注目を集める若宮正子さん。

84歳の現在もなお、旺盛な好奇心でまい進する若宮さんが語る
人生100年時代の創造的な生き方とは。

客さまサポートセンターのような部署を作
ったかどうかとか、日々の業務のなかで気
づいたことをあれこれ書いては投書してい
たんです」。

それが認められたのか、40代になると企
画開発部門へ異動となり、当時としては珍
しい女性管理職へ。お札を数えるのが苦手
だった若宮さんは、新たなやりがいを見い
だすことになりました。「忙しかったですが、
充実した日々でした。当時はあまり一般
的ではなかった長期休暇を積極的にとっ
て、1人で海外旅行に行つて見聞を広め
ていました」。

定年目前でパソコンと出会い 世界が広がる

やがて、定年退職を目前にした58歳の
とき、若宮さんはその後の活躍の基盤と
なる転機を迎えます。パソコンとの出会
いです。1993年当時、パソコンはまだ
高価で、インターネットも普及してい

ため電話回線による通信が主流でしたが、「パソコンを使っている人たちがやりとりができる『パソコン通信』というものをやってみたかった」と若宮さん。「母親もいずれ介護が必要になるかもしれない。

そうなるかと気軽に外出もできなくなる。家にいながら、外の世界とつながるためにはパソコンが必要だと。パソコン通信には、旅行や料理といった、さまざまなカテゴリがあつて、双方向でやりとりができるの

で、そこに参加してみたかったんです」。銀行の業務でパソコンを使うことはなく、触ったことすらなかったそうですが、パソコン教室に通うでもなく、独学で習得。「独学とはいっても、いろんな人の知

恵や知識を借りてマスターしていった感じでしたね。当時、個人でパソコンを持つている人はかなり変わり者というか、マニアックな人が多かったように思います。パソコン通信を利用して分らないことを質



70歳で自分史を書くのは早すぎる
いかに自分のコンテンツを増やすかが大切

問するとすぐに誰かが答えてくれるんです。私は『マーチャン』というハンドルネームを使っていたのですが、あるとき、機械のトラブルについて質問をしたら、『マーチャン、ぼくのいう通りにやってごらん』と返信があつて、その通りにやってみたら無事に直ったことがありました。相手はたしか中学生の男の子だったと思います（笑）。『お兄ちゃん、ありがとう』と返信をしたことを覚えています。血縁や地縁、職縁を飛び越えて、年齢や性別も関係なくやりとりができるパソコンの世界はなんて自由なんだろうと思いました」。

母親の介護を終えたころ、近所の主婦たちから、「あなたパソコンやってるんですって？ 私にも教えて」と頼まれるようになり、自宅でパソコン教室を開くことになった若宮さん。「教室というよりシニア向けのパソコンサロンといった感じでしたが、そこでパソコンの機能を端的に理解してもらうために表計算ソフト『エクセル』の使い方を教えていました。ところがシニアにとってエクセルは、難しそうなイメージだけでなく、そもそも実生活にほとんど関係がないため、興味が持てないのです。家計簿を付けるといっても、13けたの表計算ソフトは必要ないんですね（笑）。

そこで、シニアでも楽しみながらパソコンの機能を理解できるよう、セル（数字や文字を記入するマス目）に色を付けていつて図案を描くことを思いつき、『エクセルアート』と名付けました。絵心がな



ご自身でデザインしたエクセルアートの団扇

かったり、私のように手先が器用じゃなかったりしても、誰でもデザインができ、思い通りに描いた図案を紙や布にプリントして団扇や洋服を作ることもできるので

す」。本来、表計算やグラフを作成するためのソフトの新たな使い方はたちまち話題となり、エクセルを開発した米マイクロソフト社からも称賛の声が上がりました。「先日は、エストニア共和国に出かけておはあちゃんと孫にエクセルアートの講習をしてきました。国によって色使いが異なるのが面白い。もつといろいろな国でエクセルアートの波を広げていきたいですね」。

81歳の最高齢プログラマーが世界中の人々を驚かせる

若宮さんの創造性は、エクセルアートを機に一気に開花。81歳になった2017年、今度はスマートフォン向けのアプリ「hinadan（ヒナダン）」を開発して世界中をアツといわせます。スマートフォンの画面上でお雛さまを正しい位置に並べるとい

うシンプルなゲームアプリですが、「世界最高齢のアプリ開発者」のニュースは瞬く間に世界各国に知れ渡りました。若宮さんが開発に着手した理由は、実に明確です。「近年、高齢者にもスマートフォンが普及し始めましたが、使いこなしている人が少ないのは、高齢者向けのアプリが少ないことも理由の一つではないかと思っています。ゲームアプリも瞬発力や速度を競う若者向けが主流です。知り合いのプログラマーに高齢者向けのゲームアプリを作ってほしいと頼んだら、『それなら自分で作ってみたい』といわれてしまつて、じゃあ自分でやるかと（笑）。とはいえ、プログラミングを一から学んだわけではありません。開発期間6カ月という『そんなに短期間で！』と驚かれるのですが、このアプリを作るために必要なことだけを学んで完成させたのです」。

この偉業を紹介した日本の新聞記事に興味を持った米CNNから、すぐさま若宮さんの元にメールで質問が届きます。もちろんすべて英文ですが、若宮さんはこれをアプリの「グーグル翻訳」を使って日本語に翻訳し、日本語で書いた返事をさらにそのアプリで英文に翻訳して送り返したといいます。こうして書かれたCNNのニュースサイトの記事が、さらに世界各国の言語に翻訳され、瞬く間に拡散されていきました。「海外旅行に行くのは好きでしたが、とくに英語が得意というわけではない私のような人間にとって、翻訳アプリのような技術

は大きな助けになります。ITは、その人に足りないもの、欠けているものを補ってくれるものなんです。高齢者にこそ必要なパートナーだと思います」。

米アップル社のスマートフォン「iPhone」向けアプリとして「hinadan」をリリースした2017年、若宮さんはアップル社が米国サンノゼ市で開催する世界開発者会議「WWDC2017」に招かれ、CEOのティム・クック氏とも面会を果たしました。「ティムさんは『大いに刺激をいただいた』といって私をハグしてくれました」と照れ笑いますが、このアプリ開発によって若宮さんの活躍の場は国内外のさまざまな領域へと広がりをみせ始めたのです。

さまざまな肩書

人生100年時代の先駆者に

2018年2月の国連総会では、高齢者におけるICT（情報通信技術）の重要性を英語でスピーチし、2019年6月に開催されたG20財務大臣・中央銀行総裁会議の関連シンポジウム「高齢化と金融包摂」でも、高齢者が金融サービスから取り残されないためのIT活用のありかたについてスピーチをするなど、活躍の場は多岐にわたります。若宮さんの肩書は、「世界最高齢プログラマー」、あるいは「デジタルクリエーター」、あるときは「ITエバンジェリスト（伝道師）」などさまざま。いずれも「自分で名乗っているわけではなくて、周りが

ITは、自分に足りないもの、 欠けているものを補ってくれるパートナー



勝手によんでくれている。次はどんな肩書が付くのか自分でも楽しみ」と笑います。

最近では、「ご自身の介護経験を踏まえ、介護分野のIT化にも高い関心を寄せています」。

「現在、AIスピーカーのように、ただ話しかけるだけでさまざまな日常の動作を機械がやってくれる技術も普及し始めています。今後AIやロボットがさらに進化すれば、介護の負担も軽減できるはずですよ。例えば、トイレに行くのも人に手伝わなくてもらうのであれば、頻繁にお願いすることにも気兼ねしてしましますが、ロボットなら何度でも頼める。人材不足の問題も含めて、介護の分野こそIT化をいち早く進める必要があると思います」。

政府が主宰する「人生100年時代構想会議」にも、学者や経団連会長らと肩を並べ有識者として出席した若宮さんですが、「まさか80歳を過ぎてこんなことになるとは考えもしませんでした」と述懐します。

「でも、人生100年時代では、私の身に起こったような思いもよらない出来事が、誰にでも起こりうるのではないでしょう。よく、『70歳になったら人生を振り返って自分史を書く』などといわれますが、70歳で自分史を書くのはまだ早いと思います。むしろ、自分のコンテンツをいかに増やすかに時間と労力を使ったほうがいい。大切なのは自分史よりコンテンツ作りです。それに、ブログやフェイスブックに今日あったことを書いていけば、それが蓄

積されて結果的に自分史になるので、あらためて人生を振り返る必要なんてないのです（笑）」。

現在84歳の若宮さんですが、驚くべきことに「80歳のときよりも知能指数が高くなっているような気がする」のだとか。「おかげさまで注目を集めるようになって、世界各国のさまざまな人たちとお会いしたり、本を書いたりすることで、情報のインプットとアウトプットの機会が増えて脳が活性化されているのかもしれないね。昔から好奇心だけは人一倍あったので、それが今につながり、よかったのかなと思っています」。

長生きはそれ自体がとても慶ばしいことですが、それだけでなく、いかに自分なりに充実し、納得できる生き方をするのが大切。長く生きたいという量だけでなく、いかに質の高い生き方をするのが問われています。私も、興味を持ったことに対しては、まだまだ臆せず挑戦していくつもりです」。

まさに若宮さん自身が、人生100年時代を体現する先駆者になりつつあるようです。

若宮正子

わかみや・まさこ

1935年東京生まれ。東京教育大学附属高等学校（現・筑波大学附属高等学校）卒業後、三菱銀行（現・三菱UFJ銀行）に就職。定年を目前に独学でパソコンを習得。1999年、シニア世代のコミュニティサイト「メロウ倶楽部」の創設に参加。NPO法人ブロードバンドスクール「エクセル」の機能を使った「エクセルアート」を生み出し、81歳でスマートフォン向けゲームアプリ「hinadan」を開発。著書に『60歳を過ぎると、人生はどんどんおもしろくなります。』、『独学のススメ』などがある。